

2022年1月2日降誕後第2主日

旧約聖書 エレミヤ書 31章 7 - 14 節
使徒書 エフェソの信徒への手紙 1章 3-6、15-19 節
福音書 マタイによる福音書 2章 13 - 15、19 - 23 節

本日は、降誕後第2主日です。昨日の主イエス命名の日の礼拝では、「ルカによる福音書」の記述から、イエス様の名前の意味について学びました。

本日の福音書は、「マタイによる福音書」にある、イエス様が誕生された後のお話です。有名な占星術の学者たち・東方の博士たちの訪問と、ヨセフとマリア様そしてイエス様の聖家族のエジプトへの避難のお話です。ちなみに、占星術の学者たち・東方の博士たちという訳語ですが、口語訳で「東からきた博士たち」であったものが、新共同訳で「**占星術の学者たち**」となりました。新しい聖書協会共同訳では、「**東方の博士たち**」になりましたが、別訳として「**占星術の学者たち**」が掲載されています。ここでは「占星術の学者たち」で通します。

占星術の学者たちのお話は、クリスマスの物語に含まれる場合が多いと思います。クリスマスのページェントでも、この場面を含む場合が多いです。学者の人数は書いてありませんが、博士が複数形であることから、イエス様への宝物が3つであることから、3人と解釈されることが一般的です。また、祝日としては顕現日ですが（東方教会では顕現日は、イエス様の洗礼を記念します）、「マタイによる福音書」では、イエス様の誕生前に、天使がヨセフに現れる出来事から、イエス様誕生後の聖家族のエジプトへの避難、そしてとナザレへの帰還までを一つの物語と考えています。「マタイによる福音書」におけるイエス様に誕生物語は、時間的にも長く、物理的にも広いのです。

さて、この占星術の学者たち東方の博士たちは、何の研究者かというところ、占星術の学者たちと訳されているとおり、占星術の専門家と考えられます。彼らは、星の動きを分析して、過去の出来事と照らし合わせて、未来の予測をしていたようです。彼らは、星（占星術）に導かれて、新しい救い王の誕生の予告を予測し、その誕生をお祝いするために訪れたのです。ただし、星に導かれてというほど、この出来事は美しいお話ではありません。そもそも彼らがわざわざ旅をして新しい王の誕生をお祝いに訪れる理由は、自分たちの研究成果を証明し、訪問先の王様から何らかの見返りをも期待していたからでしょう。だからまっすぐヘロデ王を訪問しているのです。

彼らの行為は、彼らの思いもよらない結果となりました。ヘロデ王は、新しい王の誕生を恐れ、その抹殺を図るからです。それは当然と言えば当然です。王とは、見方を変えれば独裁者ですから、自分の地位を脅かす存在を、常に警戒していたと思います。もちろん、イスラエルの王は、本来そうであってはなりません。世俗の権力者ではなく、主なる神様の代理として、イスラエルを治める存在であるからです。ただし、世界史のあるいは一般的な見解では、ヘロデ王は、領土を確保し、神殿を増築し、ローマとの外交関係も巧みであった、偉大な王ということになるのですが、それは主なる神様の価値観とは異なります。それゆえに、彼にとって、新しい王の誕生は、大きな脅威でしかなかったのです。

イエス様は誕生した時から、自分の王国の王に敵視されていたのですが、父であるヨセフが夢に導かれて、エジプトに逃れることによって、無事で済みました。しかし、本日の聖書日課には省略されていますが、ヘロデは、「人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた」（マタイ 2：16）のでした。イエス様の代わりに、ベツレヘムの2歳以下の男の子が虐殺されたのです。クリスマスのお祝いと喜びとは程遠い、悲しいお話です。新年早々、この悲しいお話を冷静に分析するのも、少し重苦しいところがありますが、「マタイによる福音書」が示すイエス様誕生の物語は、ここまで含めて一つのまとまりを形成しています。

そのまとまりを最初から振り返ってみますと、律法に基づいて正しい人であったヨセフは、理性的判断で、マリアとの離縁を結論としました。しかし、ヨセフは、夢に道かれて、判断を変えて、マリアを受け入れて歩むのです。夢という理性を超えた指示に従ったのでした。占星術の学者たちは、星（占星術）という科学的・理性的な判断に基づき、はるばるイスラエルにやってきました。しかし、彼らもイエス様に出会い、変わり、夢で導かれて立ち去っていきます。ヘロデだけは変わりませんでした。ヘロデは、人間の理性を用いて、新しい王様の誕生を妨げる、もっとも確実な方法を実行したのでした。それは、どの男の子がその人であるかをいちいち調べるのではなく、すべての男の子を虐殺するという方法でした。最後まで理性的に判断して行動したヘロデが、一番の悲劇をもたらしたといえるのです。

占星術の学者たちは、物質的にも経済的にも、また社会的にも、何も得るものではありませんでした。しかし、もっと素晴らしい恵みを得たと思います。ただし、それが何であったかは、本日の福音書の1節前には「ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った」（マタイ 2：12）とだけ告げられていま

すので、想像するしかありません。おそらく、人間が考える救いとはまったく異なる救いが、今始まろうとしていることを、誰よりも最初に知ることができたという恵みであると思います。そして、その救いを目指し、これから歩いていくという恵みであると思います。もちろん、自分たちの命をヘロデ王から救ったという恵みもあったと思います。

「占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。『起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている』」（マタイ 2：13）、ここから本日の箇所が始まります。「主の天使が夢で」という表現は、最初にイエス様の誕生についてヨセフが告げられる表現と同じです（マタイ 1：20）。「マタイによる福音書」のイエス様の誕生物語では、すでに見た通りに、夢と星という言葉がキーワードなのです。

『聖書』では、一般的に夢は神様の意志が人間に現れる表現です。それでは、星は为什么呢。『聖書』には占星術に関する描写はないのですが、占星術とは、古代の科学の最先端といえます。天体物理学と表現を変えれば、いまでも最先端の学問です。つまり星とは、人間の理性の象徴なのです。

ヨセフは、占星術の学者たちのように星を頼りにしていたわけではありません。しかし、律法を懸命に考え解釈し、理性的であろうとしました。そして、律法に基づいた正しさという観点から、マリアに起こったことに対する、もっともよい判断を下そうとしていました。もしヨセフが夢ではなく、自分の理性的判断を信じていたら、イエス様とマリアはどうなっていたかわかりません。

占星術の学者たちお同じです。彼らは星を信じて歩んできましたが、イエス様に出会い、夢を信じて歩むようになりました。しかし、もし自分たちの理性的研究成果である星を信じて歩み続け、ヘロデのもとに戻っていたら、決して良い結果にはならなかったのだと思います。あまり想像したくはありませんが、彼らは、イエス様に出会っており、どこにいるか知っています。ヘロデ王側としては、当然その居場所を聞き出してから、彼らを抹殺するでしょう。そして、新しい王の誕生の話など、最初から何もなかったことにするでしょう。夢で導かれる行為が彼らを救ったのでした。

ヨセフの夢で導かれて歩む行為は、マリアとの結婚に関する事柄だけでは終わりませんでした。ヨセフは、続いて夢で導かれてエジプトへ逃れたからです。誕生まもない子どもを連れての旅は大変です。母親と幼子の健康と安全を考えれば、理性的とは思えません。しかし、その判断がイエス様と自分たちを救うこととなったのです。その後、「ヘロデが死ぬと、主の

天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて」(マタイ 2:19)、ヨセフは、家族と共に、エジプトを出ます。しかし、再び「夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ」(マタイ 2:22-23)と物語は進みます。

「マタイによる福音書」は、これらの夢によって導かれた出来事の結末、すなわち、ヨセフとマリア、そして、イエス様がナザレという町に住んだという結末を、『彼はナザレの人と呼ばれる』と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった」(マタイ 2:23)とまとめています。これは、これらの出来事全体が人間の理性を超えた主なる神様の導きであり、またすでに『聖書』に記されていた通りであったと語っているのです。イエス様の誕生の物語は、そのような理性を超えた出来事であったのです。

使徒書のエフェソ書も表現は異なりますが、「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです」と神様の計画について述べています

クリスマスは、救い主の誕生を祝うことです。救い主の誕生は、同時に新しい王の誕生という表現もなされます。それらイエス様についての様々な表現は、それまでの人間が求め期待していたものとは、異なる救いをもたらす方であるということです。自分たちの窮地を救ってくれる救い主というユダヤ教的な概念を超えていること、あるいは、ありとあらゆる文化において、様々な人が期待する英雄的・指導者的存在を超えて、人間の理性を超えた救いをもたらす方である、そう物語は記しているのです。私たちは、そのことを改めて認識したいと思います。

昨日の主イエス命名日の礼拝では、「主が救いである」という名前のお方を、主として信じることの大切さを確認いたしました。そのことによって、どのような恵みを得るのか、その三人の博士たちとイエス様の両親は、そのモデルの一つであったともいえると思います。

理性的に考えること大切です。主なる神様を信じることは、思考停止になることではありません。また、人生を歩む上での目標を定めて、努力することは大切です。自分で判断し、自分の求める結果を得た時の喜びは大切です。しかし、主なる神様は、イエス様を信じる人に、わたしたちの思いを超えた恵みを与えてくださいます。わたしたちの思いを超えた贈り物をくださるのです。そのことを改めて信じたいと思います。新しい年も、ともに祈り支えあいながら、主なる神様が示してくださる道を、ご一緒に歩みたいと思います。